OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マラルメにおける「時の流れ」と「現在」
Author(s)	坂巻, 康司
Citation	Gallia. 2011, 50, p. 159-166
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マラルメにおける「時の流れ」と「現在」[1)]

坂巻　康司

フランス象徴主義を代表する詩人ステファヌ・マラルメ Stéphane Mallarmé（1842-1898）の幾つかの作品を読み直すとき我々が窺い知ることが出来るのは、彼もまた「時の流れ」という深淵のように拡がるテーマに取り憑かれた文学者の一人であった、ということだ。

19 世紀後半のキリスト教の実質的な崩壊は、人間の思考法に様々な変革を促したといわれる[2)]。その中でも時間の概念にもたらされたものは大きい。そこでは、キリスト教の思想の根幹をなす直線的な時間軸、すなわち始原から未来の究極の地点にまで進んで行くと考えられる時間概念に対して疑義が提出されることになる。となれば、問題となるのは「現在」という時間となるであろう。キリスト教において「現在」という時間は常に未来のために犠牲にされるための時間であった。つまり、未来のある地点における神による救済や裁きのために、人は「現在」という時を常に犠牲にしながら生きることがそれまでは出来たのである。だが、神が存在しないとしたらこのような考えにどうして従うことが出来るのだろうか。こうして「現在」という時は、過去と未来に挟まれた時間ではもはやなくなり、それ自体が永遠へと匹敵する程の価値を持つことになったのである。しかし、過去にも未来にも属さず、「瞬間」としてしか存在しないこの「現在」という時に、果たして実質的な価値があると言えるのだろうか。むしろこの「現在」は、「静止」した時間であり、究極的には「無」の時間、あるいは「死」の時間ともいうべきものではないだろうか。

この時代を生きたマラルメの作品の中でも、「時の流れ」と「現在」は様々な形態で描かれている。それがどのようなものなのか、簡単に振り返ってみよう。

1. 染み込み、拡がる時間

「時の香りの染み込むいかなる絹も」*Quelle soie aux baumes de temps*[3)]（1885）という一行で始まるマラルメの韻文詩のまさにこの一行は、時間というものに対す

1）テクストは Stéphane Mallarmé, *Œuvres complètes,* 2 vol., édition établie et annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1998, 2003（以下、*OCI, OCII* と略記）を使用する。また、訳文はすべて拙訳を用いるが、筑摩書房版『マラルメ全集』全五巻（1989-2010 年）所収の既訳を適宜参照させていただいた。

2）この辺りの時間の概念については様々な研究書があるが、例えば Dominique　Rincé, *Baudelaire et la modernité poétique,* PUF, coll. « Que sais-je ? », 1984 の邦訳書（ドミニク・ランセ『ボードレール―詩の現代性―』、鈴木啓司訳、白水社、1992 年）に付された「訳者あとがき」に明快な解説がある。参考にさせていただいた。

3）*OCI*, p. 43.

るこの詩人の一つの考えが端無くも表現されている。すなわち、この世に存在する事物には時の経過、時の厚みが明確に刻み込まれ、それがあたかも何らかの仄かな香りのように事物に染み込んでいるということ。そして、その事物に触れた時、あるいは目にした時、あるいは想像しただけで、そこにはその事物に纏わる様々な時間の流れが、あたかも芳香が辺りに拡がっていくかのように感じられるということ。つまり、時の流れは「その事物」だけに存在しているのではなく、その事物から周辺に拡散して行くものなのだ、という考えである。

そのような傾向は「聖女」*Sainte*（1883）と題された韻文詩にもうかがわれる。教会のステンドグラスに描かれた聖女。彼女は楽器に囲まれ、祈祷書を手にしている。そして、そこからは紛れもなく聖なる音楽が流れ出ている。もちろん、その音楽は実際に耳に聞こえることのない「沈黙の音楽」でしかないのだが、旋律は確かに教会内部の虚空に拡がって行くかのように感じられる。

かつては横笛とマンドーラと共に
煌めいていたヴィオールの
金箔が剥がれた古い白檀を
隠す部屋の窓辺にあるのは、

蒼白の聖女の姿。
かつては晩課と終課に従い
流れていたマグニフィカトの
古い書物を手元に広げて。

聖体顕示台の如く輝くこの窓で
夕べと共に飛翔する「天使」の翼が
竪琴にそっと触れている
それは繊細な指で爪弾かれるもの

昔ながらの白檀もなければ
古い書物もなしに、彼女はその指を
羽毛のような楽器の上で揺らしている、
この沈黙の音楽家よ[4)]。

このような詩の中に感じられるのは悠然とした時の流れであろう。遥かな過去から現在に至るまでに流れた時の重みが、そこに厳然として存在し、それが未来永劫に渡って続いていくかのような印象を与える。そのような時が、音楽の比喩と共にこの詩の中には流れているかのようである。そこにあるのは、まさにキリスト教的な直線的時間軸であり、永遠を保障された時間の流れと言える。

4）*OCI*, pp. 26-27.

2. 硬直する時間

しかしながら、マラルメ的時間の概念を特徴づけるのは、このような悠久の時の流れではない。それは、むしろ「留まる時」、「動かぬ時」、「凍てついた時」とでも呼ばれるべき、流れることが禁じられた時間である。例えば、未完の哲学的散文詩『イジチュール』*Igitur*（1925）には、過去と未来に挟まれた瞬間が描き出されている。それは、そこにあるものの一切の動きが封じられ、停滞し、前進して行くことを禁じられた「現在」という時間であった。

> 確かに、「真夜中」の現存が続いている。鏡を通って時間は失われることはなかったし、壁掛けの中に逃げ去ることもなかった。その空虚な響きは室内装飾を想起していたのだが。[…]
> 「真夜中」を覚醒する者。彼はこれまで決して同じような局面を示すことはなかった。というのも、これこそが彼が作りだした唯一の時間なのだから。そして、「無限」から分離するのは、外部に、相互に虚無として留まっていた星座と海である。[…] [5]

『イジチュール』という散文詩は、極めて難解であり、かつ断片的で未完の作品である。このような作品は読者による安易な要約を徹底的に拒絶するが、少なくとも言えることは、このテクストのどの部分を読んでみても、時間の流れというものが滞留しているような印象を与えるということだ。しかし、このような「留まる」時間は決して『イジチュール』という作品独特のものではなく、マラルメの詩には顕著に表れている主題と言えるのではないだろうか。例えば、「汚れなく、生気に溢れた、美しい今日が」*Le vierge, le vivace et le bel aujourd'hui*（1885）という一文で始まる良く知られた韻文詩では、池の氷に閉ざされ、飛び立つことを禁じられた白鳥が歌われていた。

> 汚れなく、生気に溢れた、美しい今日が
> 酔った羽ばたきの一撃で我らから引き裂くのか
> 逃れなかった飛翔の透明な氷河が霧氷の元に取り付く
> 忘れられた堅い湖を！
>
> かつての白鳥は思い出す
> 不毛な冬が倦怠を輝かせた時
> 自分の生きる土地を歌わなかった為
> 華麗なる自分は開放されたとて希望がないと
>
> その首はこの白い苦悩を揺さぶるだろう

5）«Le minuit», *[Ebauches]*, *Igitur ou la folie d'Elbehnon*, *ibid.*, p. 483.

それは空間を否定する鳥に空間によって科されたもの
だが、羽が捕われた大地を怖れる為ではない。

その純粋な輝きがこの場所にあてがう幻影は
無駄な逃亡の間、この「白鳥」が身に背負う
侮蔑の冷ややかな夢想に浸り、動くことはない[6]。

氷に閉ざされた白鳥にとって、過去の時もこれからの時も存在せず、「今」という時間に繋がれてしまったままであり、その軛から逃れることは決してできない。この詩から浮かんでくるのは、静止した瞬間のみではないだろうか。

また、「夏の悲しみ」*Tristesse d'été*（1866）という韻文詩では、かつて愛し合った者達の時間が、あたかも砂漠の中に埋もれ、そのまま止まってしまったかのように描き出されている。

おお、恋に挑む眠れる女よ、砂上の太陽は
お前の髪を黄金で満たし、物憂げな浴槽を暖める
そして、お前の敵の頬の上で香を焚きながら
愛の飲み物を涙に混ぜ合わせる。

この白い輝きのいつもと変わらぬ小凪が
悲しみに暮れたお前にこう言わせた、おお、我が臆病な接吻よ
「古代さながらの砂漠と幸福な棕櫚の木々の下では
私たちは決して唯一つのミイラにはなれないでしょう！」（vv. 1-8）[7]

加えて、通称「ptyx のソネ」と呼ばれる韻文詩が示すのは、主人を失った誰もいない部屋には時間の流れそのものが存在していない光景である。

その純粋な爪が天高く縞瑪瑙を掲げている
「苦悩」は、この真夜中、松明を手にするかの如く
「不死鳥」によって焼かれた数多の夕べの夢を支えている、
その夢を、誰もいない居間で、祭器台の上に、

いかなる骨壷も受け入れてくれはしない。いかなるプティクス、
虚しく響きわたる廃棄された骨壷もない、
（なぜなら、部屋の「主」は「虚無」を誇りとする唯一の物を手に
冥府の河（スティクス）に涙を汲みに行ってしまったから）（vv. 1-8）[8]

6）*Ibid.*, pp. 36-37.
7）*Ibid.*, p. 13.
8）*Ibid.*, p. 37.

誰もいない部屋。一切の時間が止まってしまった部屋。「現在」に縛りつけられた場所。これこそがマラルメの幾つかの詩が醸し出す典型的なイマージュである。さらに、『エロディアード』*Hérodiade*（1871）も見てみよう。この作品に登場する主人公である王女が鏡の中の自分を覗き込む最も有名な場面においても、そこには時間の流れというものは存在せず、鏡の中に閉じ込められ、文字通り凍り付いてしまった自己と時間の姿があるように思える。

> おお、鏡よ！
> その凍てついた枠の中で倦怠のために冷え切った水よ
> 幾度となく、悲しみに沈んだ夢想の時間の中で
> 深く穿たれたガラスの下の葉叢の如く
> 我が思い出を探しながら、
> 私は遥か彼方の亡霊のようにお前の中に現れた。
> しかし、恐怖よ！この夕べ、おまえの激しい泉の中に
> 我が錯乱した夢の裸形の姿を私は知ってしまった。（vv. 44-51）[9]

このような停滞した時間、停滞した「現在」こそが、マラルメ的時間の中でもっとも頻繁に姿を現すものと言って良いだろう。そして、このような時間の姿に偏執的に囚われ、それを繰り返し詩のテーマとして書くことが、マラルメの詩作の中で大きな部分を占めていたことも否定できない。

3.「現在」の欠如

このような停滞した時間という考え方が極まったところに生まれてくるのは、「現在の欠如」という考え方である。そのような考えはマラルメ晩年のテクストに顕著に現れてくる。すなわち、時間が一切流れないとしたら、いま、そこにあるはずの「現在」というものも存在していないのではないか、という認識である。以下がそれを語ったテクスト「限定された行動」«L'action restreinte»（「書物はと言えば」*Quant au livre*）である。

> 自殺をするにせよそれを回避するにせよ、何もしないのは一体何故なのか。―私が説明するいつものある出来事の故なのだが、この世でただ一度、「現在」というものがないのだ。―現在というものは存在しない…。「群衆」が姿を現すことが欠けている。すべてが―欠けているのだ。[…][10]

これはマラルメ晩年の祝祭論と密接に絡むテーマであり、「現在」の出現が「群衆」の出現と同一視されるという点で難しい問題を孕んでいるが、いずれにせよ、マ

9）*Ibid.*, p. 19.
10）*OCII*, p. 217.

ラルメが現在という時間の不在を伝えているという点に変わりはない。

時間の流れが一切停滞してしまったかのような状態では、過去も未来もないし、当然ながら現在というものもなくなってしまう。そのような状態の「現在」という時間をもしも捉えるとしたら、それは目の前にぽっかりと空いてしまった深淵のようなものになりはしないか。そして、我々はそのような深淵の中でもがいているだけの存在なのではないか、という認識がマラルメにはあったようだ。彼はそのことを都市の地下トンネルを潜り抜ける列車のイマージュで捉えようとしていた。

> 外側に、拡がって行く叫び声のように、旅人は汽笛の悲しい響きを聴きとる。「恐らく」、と彼は納得する。「我々はトンネルを通っているのだ—時代という名のトンネルを—。それは長いが最後のものであり、都市の下に拡がっていて、その行きつく先は、いまだ誰も目にせぬ宮殿が戴冠されたごとく都市の中央を飾る、力の横溢する駅である」[…][11]

本来、「現在」と呼ぶべき時間が存在しないということ。この時代がまだ本当の姿を示していないということ。そして、「現在」が真の、そして最後の姿を晒す時が、未来のいつの日にか、必ずやってくるであろうということを、マラルメはこのようなテクストで示唆していたと思われる。しかしながら、そうしたことに確たる証拠があるわけではなく、マラルメのこのテクストにはいささか絶望的な響きが感じられることも否定できない。

4. 投じられる時間

しかし、マラルメはこのような滞留した時間や、深淵のような、或いは空洞のような「現在」を認め、その絶望的な有様を表現することに満足していた訳では全くない。彼が望んでいたのはまさにその逆であった。彼はそのような停滞した時間の流れからいかにしたら脱却できるかということを希求し、それを「書く」という行為によって実現しようとしていたのではないだろうか。そうした時間の流れを越えて、マラルメが最終的に目指そうとしたのは、「今この瞬間に始まる、あるいは始まろうとする時間」だったのではなかろうか。

例えば、マラルメ最晩年の作品『賽の一振り』*Un coup de dés*（1897）を見てみよう。この中で、賽を振ろうとしている瞬間は何を意味しているのであろうか。難破をし、大海原の中に沈みゆこうとする船の上で、それでもなお立ち上がり賽を振りあげる「船長」（Maître）。彼の手に握られた賽は、まさに今これから振られ、宙に向けて投ぜられようとしているのだ。

11）*Ibid.*

「船長」は […]
[…]
かつては舵を握っていた

この猛り狂う炎から　その足元の
一体と化した水平線から

いまや　準備され
動かされ、そして混じり合い
拳の中に握りしめるだろう
あたかも人が運命と　風を脅かすかのように

唯一の「数」は他のものでは　有り得ない

「精神」を
嵐の中へと
投じる為に [12)]

賽を投じてどのような数が出るかはもとより明らかではない。それに、唯一の「数」が出ることを信じ、それに向けて賽を投じるということはまさに博打＝賭け（jeu）以外の何ものでもない。しかし、それこそが最後までマラルメが求め続けた唯一の「行為」（acte）であったのではないだろうか。そしてそのような行為がマラルメによって称揚されるのは、「現在」を脱して、「これからの時間」、「今から始まる時間」が、この行為によって生み出されるからではないだろうか。

また、『賽の一振り』と同時期に出版されたマラルメの散文集『ディヴァガシオン』*Divagations*（1897）には、「聖務典礼」*Offices* の総題を持つ三つの文章が収められているが、その第一番目の「聖なる喜び」«Plaisir sacré» は、大都市パリの秋に始まる音楽会について書かれたものである。マラルメにとって秋の音楽シーンの開始は壮麗なる「祝祭」の開始を予感させるものだった訳だが、その「聖なる喜び」の冒頭部分には、そのような音楽会の始まり、つまり、指揮者が指揮棒を振りおろす瞬間を捉えた印象的な文章が見出される。

首都のシーズン開始を記す調子は、音楽会の開始によって与えられる。

毎年、同じ見世物（スペクタクル）がそこにある。そこにあるのは聴衆と―そして一人の男の背中。私にはそうしているように思えるのだが、不可視であるということから彼は眩惑的な威信を引き出そうとする。

12）*Ibid*., pp. 372-373.

一陣の風、あるいは何かを見逃すのではないかという恐れが、帰還を要請し、地平線の彼方から都市まで、人々を駆り立てる。それは、秋という季節の空漠とした壮麗さの上に幕が上がろうとする時だ。葉叢が宙づりにする、光輝く指によってもたらされる散乱が、その時、待機中の交響楽団がいる池で自らの姿を見る。

指揮棒は合図を待っているのだ[13]。

音楽が開始される瞬間の、聴衆と全楽団員、そして指揮者の緊張が、凝縮された形でこの文章には描き出されている。ここにはまさに「これから始まる時間」が示されているのではないだろうか。あるいは、後半生のマラルメを惹きつけたバレリーナの動きが示していたのも、そのような時間の流れではないだろうか。

こうしたものはすべてその場に留まる時間ではなく、常に未来に向かって投じられる瞬間であり、現在から未来へと放り込まれる時間であった。

終わりに

こうしたことを考えてみると、「時間の流れ」というものを通じて、マラルメが作品というものに託した思想が見えてくるように思われる。マラルメにとって、作品は過去にあるのでも、現在にあるのでもない。それは、常に現在から未来に向けて存在するものなのだ。つまり、作品は今、この瞬間から未来に向けて投じられなければならないという考えが、彼が辿りついた思想なのではないだろうか。それは彼自身の作品についても言えることだろう。つまり、過去における読解の蓄積がいかに豊富であろうとも、マラルメの作品が読まれるのは常に「これから」なのだということ。そればかりではない。例え過去の文学的遺産というものがどれほど巨大なものであったとしても、新たな作品というものは常に生まれ続けるということ。作品は常に「未来に存在する」のだ。このようなことを考えながら、最晩年のマラルメは自らの作品の行き先と、未来の芸術の姿に思いを巡らせたのではないだろうか。「賽の一振りは決して偶然を廃棄しないだろう」（Un coup de dés jamais n'abolira le hasard.）という一文も、こうしたことを念頭に置いて読まなければならないであろう。

（東北大学准教授）

13）*OCII*, p. 235.